

平安文人の仏教信仰

——島田忠臣の場合——

中 尾 正 己

平安時代の文化活動一般において、常に中心的な位置を占めていたのは、文人と称される知識階級、一群の中下級貴族であった。今回はその一人として島田忠臣を取り上げてその信仰の特質につき考えることとしたい。

忠臣は天長五年出生、寛平二年に没した。その生涯は平安前期にあたり、特に、貞観寛平期の漢詩文隆盛期に活躍、「当代之詩匠」と称された当時の代表的詩人の一人であった。

忠臣には「田氏家集」三巻があり現存する。平安時代の個人の漢詩集に完本の伝わるものが数少ないなかで極めて貴重なものであり、以下これを拠り所として忠臣の仏教信仰のあり方を探ることにしたい。

いわゆる漢詩文を思想史の史料として扱うには、その誇張ないしは定型化された表現文飾、あるいは濃厚な大陸風の模倣の傾向など困難な問題が少くない。忠臣の場合もその弊を

完全に免れているわけではないが、次の二つの点は考慮にしたいと思われる。

第一に忠臣の属する貞観寛平期は、それに先立つ時期における唐風模倣の風を幾分か脱し、「内面的な自己の体験や心情をかなり自由平明に表現するに至る」（川口久雄『平安朝日本文学史の研究』上）つたとされている。第二に忠臣自身の詩風の特質も「きらびやかによそいたるところになくして、自由な境地で自らに湧き出る詩的感興を素朴に平明にうたいあげる点にある」（川口久雄前掲書）とされているのである。すなわち忠臣の詩の特質は、それを思想史の史料として取り上げる上においてよりふさわしい条件を備えていると考えられる。

さて忠臣の私家集「田氏家集」三巻には十八首ほどの釈教詩が見られる。その題材とする所は、寺院、仏教、僧侶、經典などで、おしなべて当時の釈教詩一般と特に異なる所はない

が、あえて次の二点を忠臣の釈教詩の特徴として指摘したい。まず第一に、これらの詩には「世網を厭う」「俗を厭う」「世事の侵をこうむらず」など隠逸脱俗の思いが諸所に表白されていることである。この傾向は当時の漢詩文において決して珍しいものではないが、忠臣の詩には独特の切実なびびきがこめられていること、更に同様の世俗を厭う思いは釈教の詩のみならず「田氏家集」全編の一つの基調でもあることを考え合せるならば、矢張り注目にあたいするものとしなければならぬ。

第二に、これら釈教詩中に西方浄土への関心の示されているものが散見される(①②③、末尾「田氏家集」抄の番号、以下同じ)ことに注意したい。これら浄土への思いはいずれもまたま高僧(円仁)に接し、あるいは西方の嶺を拝し読経を耳にした機縁に示されたものであって、自らの浄土への思いを積極的に表明したものではない。しかしこのことは、当時忠臣の周辺、平安官人社会に浄土信仰がさまざまな形で浸透しつつあったことを示すものと考えることが出来る。

ただ当時一般の浄土信仰の主流は奈良時代同様追善供養にあったと考えられるが、その中にあって忠臣の場合は自らを「阿弥陀弟子」(②)と称し、更に「他生において最中央に往詣せん」(②)と希求する所、明白に自己往生の思想が示されている点大いに注目される(彼の女婿である菅原道真の場合も、

その浄土信仰の基調はやはり追善にあった)。

文人達の中にあっても、忠臣のような信仰の例は当時稀れであったと思われるが、以後の貴族社会における浄土信仰の動向を考えると、忠臣は先駆的な位置にあった一人と考えられる(井上光貞『日本浄土教成立史の研究』)。

加うるに、彼の釈教詩のもう一つの特徴である隠逸脱俗の志向をここにあわせ考えるならば、それがただちに浄土信仰における厭離穢土とはイコールではないにしても、忠臣の浄土信仰は現世否定的契機を包芽的に内包するものと考えてよいのではなからうか。

忠臣の仏教信仰の特質をひとまず以上のように捉えることとし、次にその信仰形成の背景を探ることにしたい。たとえば「春日野寺道心」(田氏家集巻上)に「僧を執友となす」と自らのべるように、当時の貴族一般同様忠臣も多くの僧との交わりを持っていた。「喜勝閼梨昇法橋」(田氏家集巻下)にはおそらく同族の出身と思われる「勝閼梨」との親交が記され、叡山では座主円仁から親しく灌頂を受けている(①)。後者は、先述した忠臣の浄土信仰を示す作品の一つであるが、彼の詩集中でもその最も早いものであり、当時三十代なかばであったことなどからも、忠臣の浄土信仰形成に与えた円仁の影響はかなり大きなものがあったと考えられる(円仁ではなく円珍であるとの説もある。円仁は貞観六年寂、円珍が座主に上る

のは貞観十年。この作品は貞観年間作であるが、前後の詩の年時から見て貞観七年以前とされるのでしばらく円仁としておく。

忠臣の生涯にはほとんど波瀾らしいものではなく比較的順調であつたように思われる。彼の出身である島田氏は中級官人層に属し、代々受領を勤めると共に文人の家柄でもある。先祖の清田は承和期大外記として「日本後紀」編修に参加、弟良臣も元慶期に同じく大外記として「文徳実録」の編修にたずさわっている。忠臣自身も齊衡二年二十七歳の頃に文章生となつており、詩匠として名声は高まっていたらしく四年後の貞観元年には勃海副使周元伯と唱和をかわしている。その後少外記、因幡権介、太宰少貳、兵部少輔、美濃介、玄蕃頭など内外の官を歴任、晩年は典薬頭を拝し王位に上つた。

忠臣の家柄からして以上のような昇進ぶりはほぼ順調とみなしうるし、彼自身も自らの処遇に対して直接不満の口吻を洩らすことはない。むしろ一般には「貧居と閑職に安んずる風格ある文人像」（川口久雄前掲書）と評されている。しかし彼の「田氏家集」をつぶさに見て行くと、右のような受けとり方は表面的であるように思われる。たとえば「身無繫累」（巻中）の「官銜随分忝閑曹」では文字通り境涯に安んじていると見ることも出来るが、「題竹林七賢図」（巻下）の「若遇_レ賢明聖日、廟堂充滿竹林空」という詩句には、竹林七

賢になぞらえて、自らの才能が官途に生かされないことの不満なり自嘲なりがこめられていると解することも可能であろう。その自嘲は更に「見叩頭虫自述寄宗先生」（④）中の「寸虫猶覺_レ金生義、六尺長身莫自由」という句に見られる如く、官職につながれた我が身の不自由さへと向けられる。

すなわち忠臣にあつては、自らに対する処遇をも含めて官社会のあり方に批判の目が向けられていることが看取されるのである。それが最も明確な形で示されているのが「春日仮景訪問門友人」（巻上）という詩であろう。この作品は貞観八年の作であるが、当時の詩人無用論、禁酒令、そして政治的疑獄事件（応天門の変）などに対する彼の暗淡たる思いが表わされている。

当時表面的には「用賢抽能」の人材登用主義は栄えていたかに見えるが、藤氏の専制への道、文人の世界にあつても菅原氏大江氏両家による独占の進行など、忠臣ら中下級文人層の未来にとって悲観的材料であつた。この動向を敏感に感じとつた忠臣の官人社会への批判には内に深刻なものが含まれており、彼の人生観世界観を退嬰的なものとする結果となつた。忠臣の詩における閑居脱俗の思いは、このような背景の中で切実なひびきを伴うものもなつたのである。

以上のような官人社会の動向に加えて、思想的に無視出来ないものとして老莊玄学の影響を上げねばならない。先に触

れた「六尺長身莫^三自由」の「自由」という概念もともと莊子の思想にもとずくものであるが、そのほかにも彼の詩集の随所に老莊思想の影響を見出すことができる。

自ら「孔門」につながると忠臣自ら述べているように、律令官人として儒教こそが本来彼の精神活動の中核をなすものであったことはいうまでもない。しかし彼の属する官人社会の以上のような動向の中で、老莊の思想が次第に重要な意味をおびて来たのもいわば自然なことであった。老莊の学説そのものは平安文人の伝統的教養であり、白居易等の漢詩を通じてなじみの深いものであった。白居易にも深く私淑していた忠臣がその閑居隠逸の生活を手本とし、その精神的支柱として老莊思想に拠り所を求めようとしたのもうなずけるところである。

平安官人社会に身をおく忠臣ら文人達にとって、官人社会そのものに究極の価値を見出す以外の道はありえなかったことであろう。しかし、官人社会の変質の中で、文人達の拠って立つ基盤に不安ないし不吉なものを感じ取った時、俗世間から離れた所に自由脱俗の境地を欧歌しそこに独立の価値を主張する老莊、特に莊子の説が大いに魅力あるものとして映ったであろうことは想像に難くない。ただそれが文人階層を越えた階層へと広がるには、老莊の説く所は余りに高踏的に過ぎ、そこに自ずと限界のあったことは今更いうまでもな

い。

以後平安中期における官人社会の激動と律令体制破綻の進行の中で、当初は故人の追善供養が主流であった浄土信仰も次第に自己往生を願うものとして変質をとげ、更に貴賤上下へと浸透して人々の新たな精神的支柱となつて行つた。一方老莊思想は限られた時期、忠臣などの文人層を中心とした階層にとつて幾分なりともその生を支える意味を持ちえたにすぎないのであるが、忠臣の場合に見られるように、官人社会の批判に発し世俗を厭離せんとする志向が、老莊思想および浄土信仰に結びつくという形で、浄土信仰の形成に老莊思想がなんらかのかかわりを持ったことが指摘されよう。

田氏家集（抄）

- ① 上叡山上円座主（巻上） 峻絶高峯可易尋、登攀尽力亦難□、丘陵似粒宜含口、江水如絲擬喫針、宝殿夜燈星有作、尊容秋霽月無陰、因君灌頂初知分、西刹他生報法音
- ② 奉拜西方幀因以詩讚浄土之意（巻上） 十方浄土尽嚴莊、就裏西方異九方、見説国名為極樂、承聞仏寿は無量、奇禽合奏千般語、宝樹交和集妙香、我亦阿弥陀弟子、他生往詣最中央
- ③ 林池晚眺（巻下） 若明水激有風松、過耕無量寿仏蹤（千時寄聞立寄）
此地 便想西方□妙地、讚声時和晚來鐘
- ④ 見叩頭虫自述寄宗先生（巻下） 值物叩頭号叩頭、每思避害猶能修、須臾俛仰知心切、良久搏来見血流、応似乞降初伏罪、有如求活更從囚、寸虫猶覺金生義、六尺長身莫自由

（跡見学園女子大学講師）